

第3章 復興への道のり 戦後復興と福井地震

空襲で焼け野原になった福井市は、戦後、熊谷太三郎市長の指揮のもとで目覚ましい復興を遂げ、その早さは都市計画が追いつかない程であったとされますが、昭和23年(1948)6月28日午後5時13分(当時はサマータイム)、今度は坂井郡丸岡町付近を震源とする大地震が福井市を襲います。



▲ 福井地震直前の福井市街(福井市広報課写真帳)
(昭和23年(1948)撮影 当館蔵 ※ AIによる着色加工)

昭和23年(1948)6月28日午後5時13分(当時はサマータイム)、坂井郡丸岡町付近を震源とする大地震が発生した。戦災から立ち上がり、ようやく復興の目途がついた福井市街地では、建物倒壊とともに火災が発生。木造のバラックが多く、夕飯の調理の火などから燃え広がった炎で、ほとんどの家屋が焼失し、被害は全戸数の95%にあたる16,903戸にも及んだ。市街地は再び焼け野原に戻ってしまった。



▲ 福井地震により被災した福井市街
(昭和23年(1948)撮影 当館蔵 ※ AIによる着色加工)

くまがい たさぶろう 熊谷太三郎市長の復興行政・福井復興博覧会



◀ 熊谷太三郎 ※ AIによる着色加工



▲ 復興の進む福井市街・本町通り(福井市広報課写真帳)
(昭和24年～28年撮影 当館蔵 ※ AIによる着色加工)

戦災・震災に打ちひしがれた福井市を復興するため、市長として陣頭指揮を執ったのが熊谷太三郎(任期1945～59)です。38歳という若さで市長に就任した実業家出身の熊谷は、民間から人材を積極的に起用して市役所内の改革を進めるとともに、街路の幅員拡大や公園・緑地の整備、改良下水道の建設などの都市計画を策定しました。

昭和27年(1952)には大本山永平寺の開祖道元禪師七百回大遠忌法要が厳修されるのを絶好の機会として、県と市の共催で大きな博覧会を開き、戦災から地震・水害と相次ぐ壊滅的な打撃にも屈せず、雄々しく成長した福井の見事な復興ぶりを全国に紹介することとなりました。

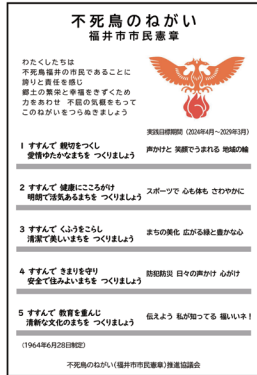
復興する街と不死鳥のねがい

▶ 福井市が空襲、地震の災禍から「不死鳥」のように復興を遂げたことを市を挙げて祝福し、さらに大発展を図ろうと、昭和29年(1954)から始められた「ふくいまつり」。当初は開会式典に合わせて戦争、震災の死者の慰霊祭が行われたほか、カーニバル、商店での売り出し、花火大会などからなる「慰霊と復興感謝」の行事だった。その後、年を追うごとに催しが増え、昭和58年、第30回記念大会を機に「福井フェニックスまつり」に改名し現在が続いている。



▲ 福井まつり(昭和31年(1956)撮影 当館蔵)
※ AIによる着色加工

▶ 昭和39年(1964)の震災記念日、6月28日に開かれた「不死鳥のねがい、市民のつどい」にて公表された市民憲章「不死鳥のねがい」は、市民が愛市運動を展開する上での合言葉として、集会等の冒頭に唱和されるようになり、その慣行は今に続いている。



展示解説シートNo.186 令和8年8月7日発行
福井市立郷土歴史博物館
福井市宝永3-12-1 電話 0776-21-0489
F ax 0776-21-1489
担当：松村知也・藤川明宏・山田裕輝
印刷：白崎印刷株式会社



福井市立郷土歴史博物館

Fukui City History Museum

展示解説シートNo.172

令和8年夏季特別展

昭和100年 ふくいのあゆみ

1926年から始まる昭和の時代、福井市は市域拡大や戦震災災、そして復興により、まちの姿を大きく変えてきました。その変わりゆくまちに生きた人びとの営みは、印刷物、写真、映像、音声などさまざまな形で記録されています。

昭和28年(1953)に戦震災復興のシンボルとして足羽山に開館した当館は、現在に至るまで郷土福井に関する資料の収集に努めてきました。本展では、当館が73年の間に収集した昭和期における都市福井の移り変わりや、福井に生きた人びとの営みを感じ取ることのできる資料を一堂に展示し、昭和期の福井市が経験した成長、挫折、そして復興の過程を紹介します。

第1章 100年前の福井

だるま屋百貨店の開業と駅前発展

大正12年(1923)、福井駅前の開発に支障となっていた福井県庁が本丸に移転すると、その広大な空き地をどう活用するかの議論が沸き起こります。結果、昭和3年(1928)に福井県内初の百貨店「だるま屋」が開業し、駅前通りの商店街化が進むとともに、昭和11年12月にはだるま屋の並びに福屋百貨店(のち大和百貨店福井店)が開店し、駅前は商業地として発展していきます。

また昭和8年(1933)の陸軍特別大演習に伴って、駅前広場・幹線道路のアスファルト舗装化や、主要橋梁の鉄筋コンクリート橋への架替えが実施され、近代都市にふさわしい姿に一新しました。



▲ だるま屋前(石川光陽撮影「昭和8年大演習記念写真」)
(昭和8年(1933)撮影 当館蔵 ※ AIによる着色加工)

◀ 昭和3年(1928)7月、福井県内初の百貨店「だるま屋」が開業した。創業者の坪川信一は、元教師であった経験を活かし、だるま屋の経営方針として子ども本位の百貨店を掲げ、子ども向け商品の充実や、遊技場「コドモの国」の設置などを行うとともに、地元小売業者との軋轢を避けるため、別館に、小売業者に貸与するための店舗を設けた。そしてそこでは、商品の陳列、正札の掲示、現金取引を徹底させ、掛け値や帳付けといった旧来の商習慣の打破に努めた。この営業方式は市内の小売業者の大きな刺激となり、経営や商店街の近代化を促すことになった。

▶ 明治以降、福井は羽二重を中心とした絹織物の一大生産地となり、輸出羽二重の半分以上が越前地方産となった。しかし第一次大戦後の不景気の後には絹織物に代わり人絹(レーヨン)織物が登場し、福井の羽二重産地ではいち早く人絹織物への転換が進んだ。その結果、昭和15年(1940)頃には世界的な産地として名をとどろかせた。

昭和7年(1932)5月14日、元馬場通りの福井県生糸検査所の一部を借りて、全国初の福井人絹取引所が開業した。翌8年には東京、大阪にも人絹取引所ができるが、福井市場での取り扱いは群を抜き、同10年には出来高で64%を示した。

福井県絹織物同業組合事務所と人絹取引所(『陸軍大演習記念写真帖』)
(昭和8年(1933)撮影 当館蔵 ※ AIによる着色加工)



おかだけいすけ かとうひろはる

岡田啓介、加藤寛治と郷土福井

昭和5年(1930)から昭和恐慌が始まり、日本経済は長い不況に陥りました。享乐的な消費文化への批判が高まり、「滅私奉公」が国民の美德として強調されるようになります。そうした潮流の中で、軍人たちの社会的な影響力が強まっていきました。中でも、海軍大将に上り詰めた福井市出身の岡田啓介と加藤寛治は、「お国の大将」として市民の尊敬を一身に集める存在でした。岡田と加藤はともに幕末福井の先人・橋本左内を顕彰する「景岳会」の会長に就任し、郷土福井の名士として活躍しました。



▲ 加藤寛治



▲ 加藤寛治 ラジオ放送録音盤
(昭和10年(1935)10月7日収録 当館蔵)

▶ 岡田啓介(1868～1952)は、福井藩士岡田喜藤太の長男として福井城下に生まれました。明治22年(1889)に海軍兵学校を卒業して海軍軍人となり、日清戦争・日露戦争にも従軍した。岡田の妹・稔穂は旧福井藩士家の陸軍軍人・松尾伝蔵に嫁いでおり、岡田と松尾は義兄弟として親しい間柄であった。

岡田啓介と松尾伝蔵▶



岡田首相と二・二六事件



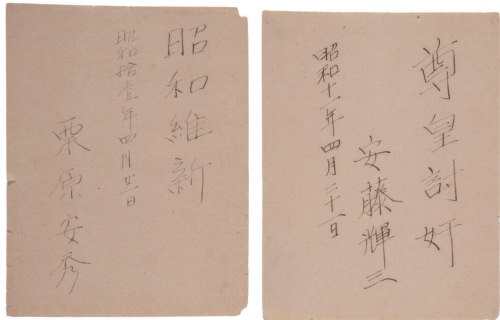
昭和9年7月3日に斎藤実内閣が総辞職を表明し、元老・西園寺公望に推された岡田が第31代内閣総理大臣に就任することになった。福井市出身者としては初となる首相の誕生に市内は湧き立ち、組閣の成った7日には市を挙げての提灯行列が行われた。

◀ 岡田啓介内閣総理大臣就任記念 朱盃 (昭和9年(1934)7月8日 当館蔵)

岡田内閣が発足した8日に岡田家が配った記念の朱盃。なお、岡田家の家計は決して裕福ではなく、組閣にあたっては資金面で大いに苦労した。猛暑の中でテント村に陣取っている新聞記者たちに慰労のビールを振る舞うこともできず、氷を少しばかり贈ることしかできなかった。しかし、記者たちは大いに喜び、自ら持ち込んだビールとともに岡田の貧乏に乾杯したという。

二・二六事件は、天皇親政による国家改造「昭和維新」を目指す皇道派の陸軍青年将校たちが昭和11年2月26日に蜂起したクーデター事件。この事件で岡田啓介首相は「君側の奸」とされて暗殺の対象となり、武装した青年将校たちの襲撃を受けた。岡田首相は官邸内に身を隠した後に脱出して難を逃れたが、襲撃部隊と対峙した松尾伝蔵首相秘書官や護衛の警察官たちが殺害された。本事件の発生を聞いた昭和天皇が武力鎮圧も辞さない強硬姿勢を示したため、「反乱軍」とされた青年将校たちは29日に投降した。岡田首相は本事件の責任を取り、3月9日に内閣総辞職した。

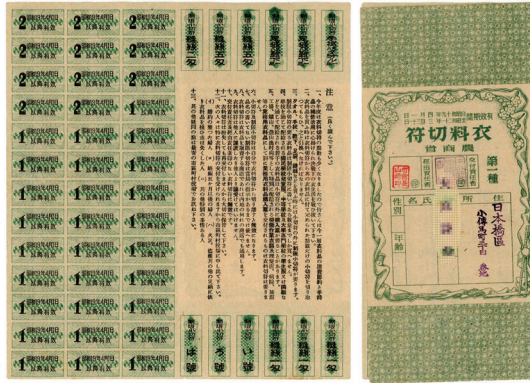
事件後、陸軍は特設軍法会議を設置し、裁判は非公開で進んだ。右は、民間側主任検事として事件の処理にあたった木内曾益(大野市出身)が手許に遺したもの。事件の首謀者となった安藤輝三(歩兵大尉)や栗原安秀(歩兵中尉)は法廷の場での意見表明を企図しており、接見にあたった木内に「尊皇討奸」(安藤)や「昭和維新」(栗原)と書きつけたメモを託している。



▲ 二・二六事件首謀者(安藤輝三・栗原安秀)から木内曾益に託されたメモ(昭和11年(1936)4月21日 当館蔵)

第2章 戦時下の人々

戦時下のくらし・市民の出征



二・二六事件以降、陸軍を中心とした軍部の台頭が進み、戦時統制経済へシフトする中、昭和12年(1937)からは日中戦争、さらに同16年からは太平洋戦争と、日本は戦争の泥沼に入り込んでいきました。福井でも戦争の影響は徐々に日常生活に影を落としていき、生活に必要な物資も不足が目立ち、配給制となるものも。兵士として出征する人も増えていきますが、悪化する戦況の中、生きて帰れる保証はありませんでした。

◀ 衣料配給切符(昭和19年(1944) 当館蔵)

▲ 太平洋戦争中の日本では物資が徐々に不足し、昭和17年(1942)からは衣料品の切符制が実施され、買い物にはお金のほかに決められた点数の切符が必要となった。展示資料は昭和19年交付のもので、大人1人一年分の衣料切符。点数の合計は50点で、1点や2点のこまかい切符を切り取って使う。

衣料品の必要点数は作業服上下が30点、半そでシャツ8点、下着5点、靴下・タオル3点などで、結婚間近の女性や妊婦、被災者などは少し優遇があった。当時の厳しい物資不足がうかがえる。

▶ 昭和20年4月7日、陸軍飛行第18戦隊所属の戦闘機操縦士、平馬康雄曹長(福井市出身、当時22歳)は東京上空に侵入した米軍爆撃機B29・戦闘機P51の編隊と交戦、被弾して埼玉県越谷市の水田に墜落した。直後に遺体の一部が回収されたが、大部分は乗機であった五式戦闘機とともに地中に埋もれたままとなった。

昭和44年、越谷市出身で平馬曹長と陸軍少年飛行兵同期であった人が墜落地点を確認、遺族や少年飛行兵の戦友会である少飛会、当時の島田博道福井市長や福井選出の衆議院議員で当時建設大臣であった坪川信三らの働きかけもあり、昭和47年2月、陸上自衛隊による発掘調査が行われ、遺骨と乗機の部品が回収された。

(左) 五式戦闘機残片 プロペラ部品(昭和20年(1945) 当館蔵)▶
(右) 同機の操縦士・平馬康雄曹長(後列右端)



福井空襲、そして終戦へ

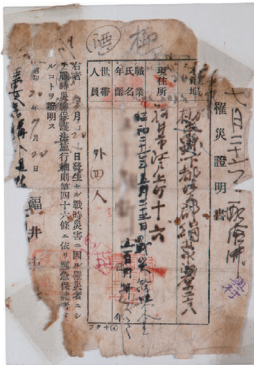
日本の敗色が濃くなった昭和20年7月19日、午後11時頃から福井市は大規模な空襲に見舞われ、1,500名以上の死者と市街地の約9割を失う大きな被害を受けます。その約1ヶ月後には日本が無条件降伏。大きな代償と引きかえに、長かった戦争が終わりました。



▲ 福井空襲直後の福井市街(昭和20年(1945)撮影 当館蔵 ※ AIによる着色加工)

昭和19年夏以降、米軍による日本各地への空襲は激しさを増しており、空襲により被害を受けた人は右のような罹災証明書を発行された。これにより戦災給付金の給付を受けたり、鉄道の乗車券を優先的に発行してもらえたり、避難先でも配給が受けられるよう手配がされたりした。

福井空襲では市役所庁舎も被害を受けたので、野外にテントと机を出し、手探り状態で被災者の救済・相談にあたっていた。



罹災証明書(昭和20年(1945) 当館蔵)▲